

# 常山紀談

附錄

五

和書門			
類	號	函	架
二	三	九	二
七	冊		

內閣文庫			
和書類	四二三〇一號	一七冊	一七函

內閣文庫	
番號	和 42301
冊數	17 ( 17 )
函號	170 49



目次

雨夜燈目次

淺草文庫

一 權現様豊臣太閤御對面の時此事

一 權現様花女を御使して 台徳院様へ菓子を進せしめし事

一 新太郎孫夏目氏の忠死を御賞歎の事

一 本多三弥木下肥後守義経弁慶を批評せしめし事

一 板倉周防守 大猷院様へ草鞋を献せしめし事

一 芳賀内藏允忠功の事

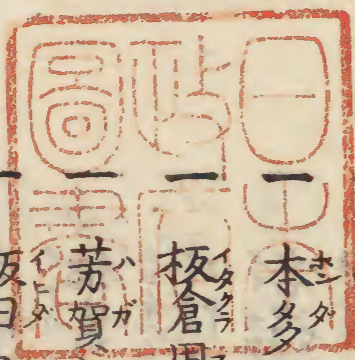
一 飯田角兵衛其主肥後守を誇りし事并 新太郎様備後七極

一 御教訓の事

一 松前伊豆守用意此事

一 古の名将学問和歌を嗜しし事并 酒和田北六器量の事

目次



武邊ハ律義者ありと事

常憲院様越後家の訴訟御齋断の事

土倉市正中村忠左衛門を勧めの事

毛利元就大内義隆諫言の事 并 熊沢助存格言の事

稲葉一徹文学に依る死を免る事

中院内府幼き宮お後見の事 并 本多佐渡守謀計の事

名將より質素にして下情不達とれ事

威恩を以て國を治めし事

佐藤五郎左衛門吐の事

以上十八條

秋雨の夜半を燈を剪る古き物語を著集めぬ事

らん雨夜の燈とりを燈

○権現様豊後太閤の御對面の時太閤我所持此道具粟田口

吉光の銘は物ありとめて天下は室とりのハ集りて

と指を折ねへ立ちし事とて清所持此道具秘蔵の宝物

ハ何れもこれと云ふ申されし事とて此の物あり

権現様仰らまはして仰られしハ我ホハ此後の物あり

但し我等を至極大切と思ひ入火の中水は平へも飛入命を

塵芥ともなきぬ士五百騎所持し此士五百人を召連

り日本六十餘州を敵ハを度々及此士どもを至極の

宝物と存平生秘蔵に存ん中御答あやぐれば太閤赤面して

返答なかりきり

○権現様駿府より御隠居遊さる

大御所様と申す

台徳院様江戸より駿府へ御出なされ二の丸より二ヶ月餘御滞

留なされしに 権現様阿茶此局を召て將軍より八年若た

人なり旅住居二ヶ月よりぬ夜中徒然なるべし花を使ふ

し菓子をもせ裏道より忍びやうにやまかり慰めも

成ぬべしと我云々とすかまゝのバ隔心あふべし汝が心得小

能むくんと仰らまされば阿茶の局御心付し上意あり

と御請し花其比十八歳女中第一の美人なりしを殊と取

繕らせ下女より菓子をもせ初夜の比裏道より密にあり

せたり肉阿茶の局よりかきと申されむ 台徳院様御

上下をめぐり待せまふよ花参りし御庭の戸をわづらひ

を 台徳院様御自身戸を明らまされ花を上座小直菓子な

御取是ハ 大御所様より下さるるなるべしとて御り

きたなされ花早々帰らまると仰られ先小御立ちなされ戸

口まぐ御送りなされまされ花兼てきくみりと違ひてい

への初もななく帰アとてかやうくありと申されば 権現様

召し召將軍ハ律義第一の人なり我とてごをわけても及

がごとと上意ありたる

○三河國箕形原の合戦 権現様御負たされ淡松をさ

し御人教習し甲州の士大將秋山伯耆下知して黒

麻毛の馬より槍をばりて再拜を腰より度々取て

大武者振敵の大將ぞ権現様追つめく討名まてて急不追

かけし御馬より残アやく討まてれば権現様も御

討死の覚悟をされ御馬を引返さし一時夏目長右衛門ころハ

御討死の場ハハハ早退をされよと申て御馬の口を濱

松江方へ牽向け鎗あつし御馬のさんづをたみりけて叩き

くまて御馬りけゆく敵と遠ざりぬ長右衛門踏まゆり敵

の多勢よ取まらぬ鎗の柄をとり戦ひく討死したり

大猷院様の御時御悦奉ありし諸大名出はあく徳川の御

家御繁昌の本さほく物語ありし時新太郎様備前守將

や暫く何れ御親もあく歩をされしが夏目長右衛門箕形

原より権現様の御命又代てふハハかやう小御繁榮ハ世

あまのうづさよ仰らまてを大猷院様せり召徳川家

の士は節義の心を今更引起しし御親もあく歩をされしが

る半なるべしと大方なると御悦みてありたりとぞ

○本多佐渡守の弟又三弥と申しは以の弟小直言をいひし

人たり台徳院様御奉公や上ぐるふ或時権現様三弥

ハ能すも考ありと上意なり其後一万石拜領たり

権現様三弥を召料簡を改め人柄を嘆むある人と上意を

くまて三弥あり將軍様ハ殊の外清ま公や上能はなふあ

のめくある主君よす後中ハ氣遠ふんと申上られまて

権現様三弥が持病又おろしし御笑たうされし又或時幸若

八九郎高館を舞々るを御上覧のそに武藏坊弁慶ハ世不勝

者なり今世ハ少くも一と 権現様上意あり

を三弥進と判官殿のやうある主君ありやべくも弁慶ハ

はなあぶくんとやされたり 曹源寺様 松平伊豫守 の沙時御大

名中御振込の席よそ弁慶の事沙時御説ふ知ふ弁慶あり

事と評判此ありや木下肥後守末席ありや其弁慶少

もあはくせなまゝの判官殿の料簡よりやれバ私の家来

ハ残らば武彦坊や佐藤兄弟より可なり故何ぞ判官

殿小なりや度と久しく心掛やれども得ありや口惜

く存り坐いひせされは 曹源寺様より召唯今の肥州は

理窟ハ拙者父新太郎が常やする事やれ能旦那より夜と

心掛いらく種々工夫も能旦那は道合点のりや

書物をや一学問仕りバ能旦那の如知事と一心不乱な

極めそれより思案を別致し古の聖賢は技を稽古し寝

てのさめても忘るやせむし形なかり道合点のり

と拙者へ申す日本國は御書は後う能旦那の形太郎事ぬ是

いまめやれと今道の道理と一つやそれバ肥州ハ新

太郎流と申すのよそ此上は道理有之やれくんと御賞義

ありたると我々

○板倉周防守重宗 大猷院様より一足献上有之是

権現様軍中よはかやうなるが能と上意ありれ能覚

もなて作て習ひんらづらそはなんあは上り御用よ是

れいづいづも献上可仕と申されは是ハ 権現様御事

より御成立遊さるる賤き下々の情をよく御存なされ非ざ  
人のいひがく御取合遊されざれば上下の志相通して下々  
怨む者なく終ふ日本の主ふたなりこれ今日本をうけ保ら  
まへども下々の情よく知り召まてハ叶ハざるより御事をとら  
よよせく申上ぐる心とぞ

○芳賀内藏允ハ小身の比 國清院様 池田三左衛門の御右筆之  
参議輝政卿

國清院様美濃國岐阜城を御攻落しなされ 控現様へ御  
勝軍の御進状を内藏允へ仰付たまふ御事なされ御林机に  
ゆなちなされゆに城中の塩硝藏は火入る菜飛出る音影は  
申すまで山崩きかゝるがごとく人々大小驚き騒ぎうらむし  
小内藏允見向もせざ少くも騒ぐ作なりと云ハ 國清院様

肉く感思召いらしく御試たされゆ唯者あざりしハ知行  
二千石下され御寵愛あり大坂陣の時天満橋御攻口なりしハ  
御先手頭加左京作を付する御人数はさくさく御法加勢  
下さるるへと申上りしは内藏允へ見分仕りしと 奥國院様

松平武藏守 仰付らるる御内藏允苗染の羽織をきて馬に乗行て  
見分せし小焼跡の土居をを楯めし居し橋より上小  
印の杭は見分せしと云内藏允御侍とてゆくと内藏  
允ハ近頃取立らるる御内藏の考あり右筆の武者振えよと  
さや合居し御内藏允馬より下り閑は川岸をゆを城中  
より鉄炮をおかくる水響きそ殊に烈しくなされゆ内藏允  
ちつとも騒ぐ足敷をかきへ帰里いゆも各々の申され

の通たり可上とて御旗中へ歸りて後番大膳と兩人  
よ御仕置仰付らまじ小大膳ハ遙より劣りて願ひ可や  
有る大膳よ云々これハ事能可洩や小答へるも  
興國院様の御前より十分の事を請中述及内藏  
云々これハ内藏の色をかへた後ある事且形へや  
あつて拙者ハ得え次第と荒らうに申切く御前へあり  
てハ事の子細を申上り御入る時ハ烈しく御せり合を  
是非とも願のこゝろ増をぬく後其人を呼よせ申上り  
あつて事よてハなすも申上りて御上の御慈恵  
御肉届ありてと申上りてそのことなり度御  
前へ御請を申上りて幾度と申上りて後ハ是を  
御肉届ありてと申上りて幾度と申上りて後ハ是を

傳へて内藏御為を思ふ事大膳が及ぶまよ非びて賞美  
御前めく命を弁く申開き致さるハ一旦の事やく仕能き事  
折へて國の仕置ハ極め大事のおるまバ大膳が一旦の骨  
文禄年中朝鮮より虎を引來る鐵の鎖をつけ両方より七八  
人取付て引たり朝鮮先陣の諸大將より名護屋より集  
らまじ時彼虎を大力の男あつてひきとりどつと云てかけ出  
かゝる居らまじ申を通りて人々皆驚き騒ぎ立てり  
小加藤主計頭正膝立並一拳を振り臂を張くまじ  
小虎も走り踏留りて清心をのみみ通りて加藤



サマノミチ 嘉 龍馬助 明ハ初より壁おりのまじかりく居眠アまくあつて  
虎の通りつて後小暫有く目を突き何事小強ぐまこんや虎を  
牽通まるとな死と閑は言まうと主計頭の子肥後守廣と  
大父小勇まう人あり或夜近習の士と物産し我ハ大力小  
かり夜あつり重き具足二領打かきひき軍小安あ鉄炮  
の恐しき事まぶるべとまを飯田角兵衛ハ父の時より  
奉公しなく武勇の働有る老功の者なりしが是をい進  
出く先殿様ハ具足一領少く志津嶽七本鎗の武功より幾  
度も軍小安あ知るまはれども終小薄手も負せ給ふ  
朝鮮國ハ攻入り鬼將軍と異國の人も恐まをうらひし  
死生ハ天命やくゆせん用心の分別よてハまをりやくあふ

但よく戦ハバ生き悪く戦ハバ死するとも古語のハ國中ハ百姓  
を随分小いさるり家中の士能心服しなうまづき従ふ時ハ是れ  
上あも軍ハ勝負ハ道理明ふカアハ軍の場よあつても  
千万の人数手足をつらめくよかりハ御家中の士も  
忌中具足ハ皆大將比御一身は打かきひき召まると同し幸あて  
はなれり御家中の士心小離まひるばたし百領千  
御具足を召れとも何は御小立てや歎く御一言よ  
はとひひく退かき先殿ハ何とくあれまはハあらせんよ  
やとて声を上げて泣きわらうとぞ其後忠度滅亡せられり近頃  
ゆも 新太郎様の仰小取付へる大兼平何の用より立へる  
家中の士此刀を残り用小立させらんハ向ふ敵ハあるまら

大名の身タミヤウもくカタチヒトコシ刀一腰を頼タノふせんハ口惜クチヲシき事シゴクの至極シゴクあり  
と備後守ヒノシヨウ様御戒イニマダまじしと飯田イヒダと回オチり理リよこそ

○松前伊豆守マツマエイヅウシ元禄年中ゲンロク京都町奉行キヤウトマチブキヤウヤドメ勤シメらまじし時海保友竹カイホウイウチク

ハ畫師クワシ希ミナリく紅梅コウバイのよヨクくサキ花ハナをイナカカ生ナまマすヲ見ミる御所ゴシヨ

司代シダイ并ナヒこまコく様サマありてハかハやヤの初花見ハツハナミやヤうウばバとトりリふ

伊豆守イヅウシとトかカのノ返答ヘンタウたタくク落涙ラクナミせセれレり友竹イウチクいイらラるルあアらラ

やと案アン居イるルふフやヤあアのノ能ノくクそソいイれレ誠マコトよヨ左サ様サマかカらラ

我ワホホ不肖フセウの身ミもモくクかカらラ重オモきキ役ヤク義ギをオホセ仰オホ蒙モウりニ威イ勢セあアらラ

をシラ先マづマうウらラくク心ココロ付ツケるルハ大オホきキあアらラ油ユ筋シたタりリ是コトハ付ツケこコと

大事ダイジの役ヤクぞゾと思オモへヘバ氣遣キツカハハハくク落涙ラクナミしシるルぞゾといイはハれレしシ

なり假初カリソツの一言イチゴンもモかカらラ心ココロをツケ付ツケらラまマじシハ古コの君子クニシ此道ココノミチありリビ

されレバ此コノ人ノの仁徳ニトク京都キヤウトよりヨリ後ノチまでマデ申傳ウケツケへヘらラるルことト

○太田持資オホタモチスネ後道灌ノチミチノリ上ウヘのノ家イヘ老ロウありリ鷹野タカノよヨくク兩ニよヨあアらラるル百姓ヒヤクシヤウ乃ニ

家イヘ入イリくク簑シノをカけケてテ云イハふフはハ若ワカきキ女メ扱アハハハ何ナニもモいイはハれレしシ

て山吹ヤマブキの花ハナ一ヒト枝エダおオくク出デるルはハ花ハナをカきキてテいイはハれレしシことトいイはハれレしシ

たタらラしシてテ腹ハラ立タテてテ歸カヘらラまマじシはハ是コトをツケりリ人ノのノそれレハ

七重シチカサ八重ハチカサ花ハナのノさサけケでもモ山吹ヤマブキのノみミれレひヒつツふフさサなナぞゾいイはハれレしシ

といイはハれレしシ古コ歌カのノ心ココロもモくク簑シノあアらラるルことトいイはハれレしシことトいイはハれレしシ

ヤヤらラまマじシバ持資モチスネ孩コくク吾ワ是コトをツケりリのノ事コトをツケりリ知チるルぞゾ百姓ヒヤクシヤウのノ娘メよヨ方カタ

まマじシるル事コト口惜クチヲシきキ其ソノよりヨリ書シをツケりリ歌ウタのノ志シをツケりリ下シモ総サウ

國クニへヘ軍イクサをツケりリ時トキ山ヤマ邊ヘのノ海ウミ邊ヘ山ヤマ上ノよりヨリ石弓イシユミをツケりリ激ヒキ燃メへヘ

らラババ通トりリ難カタくクべベーー如何イカニとトいイはハれレしシ折オリ節フシ夜ヤ中ナカあアらラるル持資モチスネいイざザ

見て来らん馬を乗せしるが其後歸て瀬ハ干しりとき  
軍を押通されたりこれぞ

ききたり近きあみの深みちなるる瀬の満干をぞし

とよめる歌ありそれをぞひかしく千鳥のあう遠く閑ちしれを

瀬の干しをを知しるるなり又退口利根川を渡す時そも夜

半よきとくはらふりしづこ浅瀬なるまこと口ふひしり

持資

そはひる見淵や八さらりく山川のあまた深ふこそはげ波ハこ

はよある奇あり波の荒き否を渡せと下知し難あり浅瀬を渡

アさりされハ昔より武将ハ必學問よ心をせ歌の心を知らひけ

ア奥列の合戦ハ八幡太郎義家安倍貞任宗任を攻め衣川の城ハ

追つあまひ時きこも後をらすり物りんとて

夜のきこくハちもろびしりりり

と云うけ多ひハ貞任志まらを振むけく

年をいへたれみひのしりり

と付たりされハ八幡殿をげしる前をさしりりりりりりりりり

る烈したあかかくけけしりりりりりりりりりりりりりりりりり

斯く八幡殿上京の後宇治に閑白殿ハ参りく軍物後ありりり

を中納言匡房卿はて器量ハかくこれをも軍の道ハ知れとつぶ

やききりりりり八幡殿の即ち家てゆり事申されゆり八幡殿ハ

やせりりりりりり八幡殿子細有べりりり匡房の中納言車ハ参り

所ハ参りりりりりり會尺きりりりりりり弟子はたりりりりりりり

永保の合戦ハ八幡殿金沢の城を攻らる時一行の雁代菊田の面  
おらんしつらるが俄に驚き飛乱まらるるを八幡殿清隆見よて馬を  
ひきて中納言殿小学問しつらるふ兵法小鳥起者伏也といひあり  
定めて伏兵あべしつらる好の三方を取巻しつらる八幡殿のさや  
三百余の伏兵居しつらるを攻破らるる八幡殿小学問よ心をよせ  
流しつらるるかゝる事を知りつらる右大将頼朝卿和歌よ心を  
よせつらるひ近き年信玄謙信兩人とも詩歌を好つらるる蒲生飛  
弾守氏郷八伊勢の松崎十二万石あり奥州會津百万石を太閤よ  
拜領あり奥州を切静めつらる無双の猛将ありつらるるも極めて和歌  
をすつらるるつらる氏郷の家よ佐々木氏鑑といつらる名高に鑑ありつらるるを  
細川越中も忠所望ありつらるる家来ももは八名抱よて別れの似

よりつらる鐘進せられよと申しつらる氏郷

あたたまごて人よはいじつやまもつらるるのともぞいづつらるへん  
としつらる歌の心け取つらるるきつらる彼鐘を贈られつらるるつらる元弘の乱  
よ菊地寂阿入道が 後醍醐天皇の勅令よて敵の城よまらつらる  
櫛田の官前よつらる馬のこつらるつらるつらる

ものつらるれ上つらるれつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらる  
と詠つらる神殿の大蛇を射つらる馬のすつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらる  
故郷へ一首れ歌をまつらる付つらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらる

つらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらる  
つらるつらる忠義の為よ命を弁つらる皆文武の人つらるつらるつらるつらるつらるつらるつらるつらる  
つらるつらる悲も名高き士ハ皆書を讀つらる小学問つらる和歌をもつらるつらるつらるつらる

梶原が一の谷カチハラ イチノタニ

物モノのふれとうりつゝききあつてひびきくハ人のかへまのハ  
とよも奥州アウシウを頼朝ヨリトセを攻らる時白河シラカハの関セキを越コエるや梶原カチハラ

秋風アキカゼよ草のたのまをそとせりせくつるがこゆまバ関セキをコエるなり

とよもくろのとうやすてガクモシ学問ガクモンく高タカカた勇士ユウシ多オホく文武ブンブハ二ニあり

詩哥シカを公家クダの玩物ワンブツと名ナへハ毎下マゲは口クチ惜シますなり近チカ江カホ

大猷院ダイウイン様文武ブンブは関セキある士シを陪臣バイジンの中ナカより十七人ニナニ撰ニラてせむ

小永井コナガヰ信濃守シノノクサの家ウチは酒サカヰ和田ワタ喜六キロク歌人カヒトよみく

芳野ヨシノの心をくくくんの心ココロをくくくくふかふるヨシノは

とよもくろの歌ウタをきき召メ是も又文フミの一事イツニシあり喜六キロクがさくやある

事コトハ内ウチくすサ召メきくとして彼カノ十七人ニナニハ中ナカへ酒サカヰ和田ワタをコ入イれせむ

り此酒ココノサカヰ和田ワタまやや風流フウリウのををがくく人ヒトハ非ヒ林ハヤシ道春ミチハル

聖賢セイケンの学問ガクモンをも身問ミタトヒたり信濃守シノノクサ江戸エドの留守ルシ家ウチ中ナカ勝カチ少シウ迷メイ

惑マドして喜六キロク小形コカガタひく金銀キンギンをかりなりを云ヒく喜六キロク則ソト信シノ

濃守シノノクサ小コかくもや蔵クラの銀子ギンシ千貫センガン日貸ヒカシ与ユへくまバ信濃守シノノクサ江

戸ドよりゆり大オホ腹ハラ立ちく貸カすとも何ナニとて我ワレ亦モハ云ヒぶるや我ワレ信シノ

貸カシす事コト不フ屈クツありと申マウされくまバ喜六キロクゆりされバ其ソノ事コトよみ

只今ただいま私シを流ナ叱ヒりあるれハ志シをなむ急イサヤ上ウへとて御ミツ屋ヤ

はなをまカネと兼カネてなカネヤ上ウへて御ミ家ウチ届ツケをコ申マウふハ押オシて貸カシす

事コト何ナニもはなを又御ミ趣ソウ意イをモちりゆりて貸カシす不フ中ナカ耐タハ清シヨウ家ウチ中ナカ大

は迷惑メイワク可カ仕シハ上方カミカタの商賈シヤウ町人チヨウジンの銀ギンを借カリて返マカるの利リを遣シり町人

小利コリをコらせんでハ毎マ益イキの事コトハはなを御ミ藏クラの銀子ギンシを貯タマへ置カすハ

軍用公用の為よはなれん御家中貪乏を救ひ人馬をへしと  
知行高の格を勤めし事軍用の本よはなれんこと  
の齊奉公ともなれへバ大ある公用よはなれん且又所藏の銀を取  
りしども少くもなれり中事毎馬守十年賦よ申付し十年  
此間よ申のめく返并仕は是上少の損もなく下よ大ある益  
少なれり御家中忝しと存る上の大益よはなれん私一人の私  
咎を蒙ることもなれり外小御用人ハ更も存せ給私一人の  
為よはなれん間いふことも罪よ仰付し事しへし中事れば信濃  
関口致さし事なり

○律義ある者たうてハ武をハせぬより昔より云傳へし加藤  
主討頭清正剛の者をやしくとひ一生の間目利よ心を尽し人相

コゴを秘昔古致さし事なりとも其術を得らまは唯律義者よ武  
をも多しといひまじりとなり又加藤左馬助嘉明よりされしハ  
ハ氣されの々あげたる者ハ人の目を驚くはわざの働をまじり  
へとも踏つめし武功ハ律義ある者小しやたえハ頼もまじり  
且那の威衰へし人よ二心を持つ申小獨義を守りていふがまじり  
強ハ律義者ありてなれり事あり諷ひ者ハたとへ万一は一旦の  
武邊ありても曾て頼みならず且那の出頭を心掛知行をたて  
人よ笑はしむるも恥ハ已もなきこと其恥を取らしむるも恥ハぬ  
者ハ且那を殺して身のためよはなれり事ありハ為べきなり偽と貪  
とハ品ハかまじりも落着ハ回し事なりと云まじりあり

新太郎様も常小縮ひ老し知れを与へて盗賊を抱へ置と同

事なつりと仰らまじりしより智者の誦割符を合せしむるがめり

○松平越後守光子なりけりは家督八実の弟永見大藏なるべしと

大藏も思ひ又家中も大うこそ是ぞと思ひ追従しけり小栗美作あ

くまで邪智あ者ゆく御家督ハ大藏殿よりあさべいと云人あれ

ばた後思ひあんと返答も大藏守傳へく悦びり諸江戸へ家督

の事窺は美作初バ大藏も頼むといはちるまじりも暇乞小事あせ

く念頃の件あり美作江戸へ行才覚を思ひしり三河守を立じ

との議定なり一伯配所その子永見頼母と云其子を三河守と

しり永見大藏ハ頼母が弟あり是も配所より生まじりしりあり

是より大藏大よ本意を失ひ家中日頃大蔵様へ取入しり面も

あまじり然も上意と披露する上ハせん方あり美作ハ大

藏を欺きしりと獨笑して三河守をり立く権威を大よ振

えんと思へり大蔵堪兼くかひり入兎の面く徒黨して美作を

打果さんと萩田主馬あど張本しり美作を思ひ振して合合

さて美作ハ越後守の妹婿あまバ子大六も越後守の姪あり一門此

如く家中の士路志しと云せしりこれあり家中騒動して終つら

江戸へ訟へ救年決定せしりしふ常憲院様御代始御自

身双方の公事を御城殿中しく聞召御決断あり越後高田

二十五万石召上り美作死罪仰付らまじり子の大六ハ曹源寺様

へ御預天和元年六月廿二日御屋敷弓場北東作庭より是も死罪

よ仰付らる永見大藏萩田主馬ハ八丈崎へ流罪其亦死罪流罪不

仰付らまじり士数多あり此名扱子付渡る大隅守八丈崎へ流

罪松平大和守閉門仰付し翌年二月閉門御免姫路十五万石  
召上らまき後日出し五万石下され松平上野介廣瀬三万石の内  
一万石召上らまき酒井雅樂頭久世大和守御老申職召放し  
是皆致後守暗弱して威を家老用人に奪はまき欺くまきゆゑ  
なり  
常憲院様の睿察異國唐の玄宗を太平の天子と申  
しふくまきと其より諸國畏き服しなりと云

○池田の御家此家老土倉市正八郎共溺が事ありて実を滋川  
左近將監益の先手此士大将岩田小左衛門なり  
番に難く可然し御味遊さまき未決定を以て市正は御尋を  
りへ市正兼り中村忠左衛門を忠を存し事私に對し  
毛頭も縮ふ心のなれば男めくはゆゑあれはくある老小仰付ら

まはして誰かおはゆゑまきと誓立たまは  
嫌大くあるまき忠左衛門は使番を仰付らまき日頃市正と忠  
左衛門は大小不和なり御前よての様子を忠左衛門は語り  
人ありまき忠左衛門日頃の不和を少し後悔の氣色あり又此由を  
市正は語らまき人ありまき市正御尋より能人をや上らまき  
ハ兩國の為あり毛頭も私の慮ありまき不和ハ本の通は  
不知してこそあれ忠左衛門ハ吾心をなまきと云まき此をぞ  
家老の職を失はぬ人なりまき君より臣よりとて守誠  
あり

○大内義隆ハ周防長門豊前不領國中々安藝石見も領地なり  
太宰大貳を為し後筑前も下知し随より周防の山口小居城



て其比并ヒヨトきた大名ダイミなりけれヤク漸武備スビ又急オク遊山ユサンを樂タシ茶チャの舎シャ  
よ日を暮ク家カ中國チュウクワ中の難義ナンギを處ツクも知シ仕置シオキ八家老ハカラウの陶尾張タウヱチヤリ  
守晴賢ムツハルカクは任ニカせしまム尾張守ユヅリ二心ニココロを持モツきしム毛利モリ元就モトナリ  
乞コレをウツ或夜密アルヨヒカは義隆ヨシタカの前マヘは古コより國クニを奪ウバひし事コト皆ミナ其  
家イのカラウ家老カエラよケてライひキてキ明君メイクンハカよケくキ家来ケライをウ引キきキハカ威イをウ家老カエラよ  
奪ウバひキてキ威イをウ家老カエラよケ奪ウバひキれキてキハカ役義ヤクギをウ云イ付ヒツケ知行チキヤウをウやりキハ  
ても其主君シユクンよりカ下知ゲチとウ家老カエラよりケ取トリたりキしム心得ココロエひ  
友トモ其シ君クンハカあカまカじカりカ無ムがカどカくカもカ家老カエラ役人ヤクニンの勢セキ次第シヤイ強ツヨク  
たカつカくカ後キよカハカ其シ主君シユクンをウ殺コロしキ國クニをウ奪ウバひキ今イマのヤウ様サマ危アヤシくカるカ  
決心ケツシンをウ付ヒツケらヒまカじカりカとウ中ナカもカひカしカもカ義隆ヨシタカ合点カクテンあカくカ遂ツヒはカ尾張ユヅリ  
は殺コロしキまカじカりカ案アヒじカりカ是コトハカ乱國ランコクの世セ此コト事コト少オホくカ太平タイハイの時トキハ

君キミを殺コロしキまカじカりカ事コトハカなカらカまカじカりカ主君シユクンをウだカまカじカりカ其威イをウ奪ウバひ  
名ナハカ家老カエラ用人ヨウジンの常ツネれ事コトなりカされカハカ熊澤クマザ助タケノ存ゾノとカ後キのコト事コト  
新ニハ太タ即ソク様サマの時トキ執政シツセイしカりカ常ツネ人ヒトはカ後キにカやカがカ今イマのコト大名ダイミハ  
家老カエラ用人ヨウジンよカだカまカじカりカ我ガ國クニハカ皆ミナ家老カエラ用人ヨウジンの物モノと成ナれカ下シモの教オシエふ  
をウ終ハヤまカじカりカてカなカまカじカりカ事コト少オホくカ知シらカ下シモの情シヨウをウさカじカりカヒ  
心ココロ付ツキあカくカ何ナニ十ジュウ方石ハウシヤクの身ミ上ウヘゆカもカ國クニをウ持モツてカ有アルべカいカと語カタら  
まカじカりカ智チ者シャの知チ何ナニハカ遠トウくカ志シまカじカりカ當アタまカじカりカ世セと成ナれカぬカぞ悲カナ  
一ヒトとカすカ  
○イナバ稲葉伊豫守イヨノヲ一イツ徹テツ織田信長オダノブナガは従シユひカまカじカりカ信長シユンチヤウ心解シンゲでス数奇スギヤ屋ヤ  
て茶チャを賜タマひカりカ其シ席セキよカくカ刺殺サシコロさカべカいカの巧タカクなりカ一徹イツテツ数奇スギヤ屋ヤ  
入イるル時トキ相アイ伴トナリの二人フタヒト挨拶カケモチは掛物カケモノのエはカ讚サンをウ傳ツタへカりカ是コトはカ韓カン

退之の詩よく雲横秦嶺家何在雪擁藍關馬不前といふ句あり  
一徹少し字向ありく讀々く小相伴其心を問ふ一徹ありく子  
細を吟々々々バ信長壁越よきをみつと走知く一徹よハ荒勝  
負むりする勇士とてひりよ今聞く如文学も達せり詩特の  
事感する所ふ実を語るべし今日の内てありハ茶の湯よあ  
らど其方を刺殺さんとせし巧きあり相伴の三人皆懐剣を差  
し今日より永く我に後ひく謀を致されよゆめく害心強  
止しと云まされバ三人の相伴懐より小脇差を取む一徹平  
伏しと死罪を御免下されし事忝私も内く今日殺さるべき  
みくいらんと察しゆれば詮方なく是非一人相手を取つると  
存用意はんとて是も懐剣を取むし信長よ刃せ申されバ信長

いよく其心づけを答らまきり

○青蓮院の言ふや幼き宮方は中院前内府通茂公御後見し也  
小或時將某盤のあをを見く家司坊官を吟く何とてかやう  
のうくあはれおを置々々ぞとくあはれ業ハなよりあしとまきり  
たしひもて御年もまての後ハ御心付く止事も有ぬのたかり  
是等ハささく悪事よあはれまきりも其事ハなまきり空しく月  
日をもと御学向の御志忘るぬのあはれまきりしものごとく云ま  
きり誠よ内府公は御志極くまきり又或時其宮へ出入  
り者尺八の名高きを御目ふかけしり大事の器とて折紙をど  
付しりかきり内府公へ入るまきり是ハ誰が業ぞかやうのとれ  
御目ふかけし事やあはれと云まきり柱よ打あてく碎りまきり其

後尺八の主参りたる其由を後りせしむるに宝物お碎れ  
くさるる氣の毒ありと坊官をど云ふ尺八の道少も苦く  
ぞ唯私の持しと内府公のすし召まん事恐しく御園を  
ハ私の仕合なりと申するとして其子通躬卿も嚴ある人少くお  
らるる人の後見よはかる人をしげな事なり豊長秀頼小  
権現様御對面の後本多佐渡守正信を召く秀頼ハかこた人あり  
中々人の下知を受べき人よ非ど父太閤の跡を継るんと終るさ  
らひく上意ありたり心信承りいやは私をりびふく秀頼を  
愚ふあり申さん事いと安き事よはなるとして退むるなり  
秀頼卿の御臺所ハ將軍様の御娘もくもらるる事よ  
佐渡守御臺所の上臈女房は對面し上る上下たよ女ハ嫉妬

をありし事の至極とせり秀頼ハ日本の主もくはなへハ御  
召仕の女房大勢たつと不叶るあり何とて秀頼ハの御  
男子の誕生おとせ長家の御血脉相續あるやう願ふおられ  
ば必美人を撰み出しあまう御傍に置きよめ嫉妬する人あり  
女ははいとせど我考科よ申すべしと同く云合めり又秀頼  
卿の近習此面く小意てハ御賢くはなるともいふ事大御所  
御此外悦よはなると常々猿樂を御慰よたされ少くの間も御油断  
なく御かくりはなると不有な御事生第一の事よはなると唯  
今御年若きうら何と御心傍の事よてハ持病を御癒ひを  
此段氣の毒よあよはなると御仕置の事よ御心をうけ  
こせよまぬやうよとかく猿樂の謡舞よて御事生第一よはなると

まよふ身なかりははる大切らしく云たうくまは皆尤とす請て  
秀頼の色は耽て猿樂を好む多し仕置の事毛既も知らばし  
てや下の情はあやふも合点たたくらなく終小滅亡一蘆田矢倉  
よく自害し多し日本の主を失ひやされし事本多正信の計あり  
秀頼々も中院内府公のめき人後見しりせば本多計も徒とあ  
る事此事ハ今太平の世あるまは敵國より大名を愚むむべしハ  
まじも今の大名も皆家老を初く重き用人の為小愚は成る  
事ぞう其子細ハ主君下の情を知り能人を用ひるハ已が次な  
る事なり難き故いりあしめて主君を愚したるせりと明暮心の  
中願ふ事 和漢回どきめし小ぞある此事ぞ小大名の辨へ知  
召まんハ人小なきれも事いふべし

○井伊掃部頭直大坂冬陣は物見二人を有る雨は濡て帰る事  
様子をつと後則著らまう小袖二を脱く兩人はやらまきり  
さて安藤帯刃直へ小袖をゆひしきと我亦かやうの事まき  
着るもの二つあう家来もきとる忌替毎々んとく帯刃の贈ら  
し小袖をさく草袴もく 権現様の御前へも度く出される  
とぞ今の世を以て見まは三十万石の身体わく着替のなかり  
いふはらやうある事と不審なる人もあれも大換其節のあり  
如此なりしあり 権現様大坂夏の御陣小御旅所用之の  
仰知さまし小膳米五升子鯛一枚味噌鯉節よて事足るべし味噌  
多く持たせると上意あるべしゆかやうなれば武備ハ曾く以  
てうけられた事なうべし掃部頭かやう小質素なりけれも彦根ハ

湖上より船ゆく都より不便より一うば太平の後八彦根の七  
とも大小驕りて風俗あつく衣服美麗となりてを掃於頭儉約よ  
かへてべき道を積りて江戸より歸る時本綿の衣服を供此士の數  
ちど用意し彦根へ到着の朝俄よくむりて与へて著せしれり彦  
根の家申且那を待受よ著かむりて迎よ知るふ供の士一同よ  
木綿なりしうば不審なるよ且那掃於頭いふもよれし本綿  
の衣をさへて駕籠の戸を開きそれしふ言をきかけらるを見  
く已が身を顧みくアハもの衣服引さたしとて地しとてまより人  
質素よ成りしとて 國清院様村の庄屋よ高一石よ付米二升  
宛免ゆりしとて年号月日堀甚五多お友と御自筆よ遊むされ  
しを今其家よ持傳へしり百万石の御免れ上よてかく有る事

怪しむるものありども是ハ戦國の世ともやべー 新太郎様

この竹を裁く枕小せよ何村此種米ハかやう小せよ何の役ハかやう  
よせよと云敷御自筆よ遊むされし御書の予が曾祖父よ下されし  
數十通箱一ツよ有る傳へしり今ハかやうの事を郡代も知ぶる体  
たり衰へし世のありさばよこそ太平久しく亂を忘まき人々  
波の暖あつて小士の風俗以外よありて明暮酒り茶の合  
小無益の費をり川遊物治よ目を送てて礼義の方よハ心をも  
付ど馬具武具いふ小成事しんをを知ら多く町人の家よ質小を  
り物語するをよけバ女色の戯ま言のよして士の道ハはち  
語ア知しもせよ又儉約よ事よせり利欲よ耽りあふぬむきた  
事をしりも恥し思ひ親族朋友の難義を救ふもあくる人

の物を借く返さずを忘るる勢口惜き世のありさはなかり但  
此事ハ士の上をよりやも非ざるべし天下の人を四ツよこらあ  
士農工商とす事ハ古より定まりし事なり其重き士を  
あつて持たぬを大名とす事ありまば天下の貴人ハ大名ありて  
おろし中然る今の大名貧乏よさうのまり買つて物の價を  
やうに國中の士民の艱難を救ふと四民の中は第一の下劣の町人  
を頼る金銀をかりてさうやく漸くを續めあつて口惜き事  
至極なり天下の貴人ともく天下の賤しき町人は手をさげさ  
彼等が料簡小よりてさうやく小身体をおせぬといふ事やハあ  
づたされども世のなまらうとぬまは是を恥ともせざるべかり  
まことさうさく事ほく思慮ありまらば大名の恥辱此上や

あつてまされば古より質素を能くする奢をあき事とす  
る故何事あつてや

○新太郎様常々御意あされハ家中國中を能治んとすは  
威と恩との二つありて威なくして恩をふるなればあやうし  
子れ者訓をせぬてさうやく用は立べく又威をふるさうやく嚴  
きを第一とせば上むきよ納得まらざるも高実なつてさうやく小非  
祢ハ是又あつての事なり恩もて能かづけ法度の少くも崩さ  
ざるめくは貴尉を行ふを威といふべし恩信あつてまは威も無用  
の事なり威あつて恩信も用ひ立せむも畢竟の所ハ能下  
此情を知りて大下事あり下情を知れば恩信も威も用ひ立  
まらざるも免れも角も聖賢の教を稽古あつてハ此一輩ハ

かぐしと仰あつた

○前携の城主酒井雅樂頭清佐藤五郎左衛門直方を付の外崇敬

客入れりらひたりき或時五郎左衛門井伊掃部頭のめし招請

せし未だ掃部頭對面し家老用人扱候りし時

五郎左衛門中々の大事と申すのハ勿論少のりざめても傳授替

古と申すはなれりて師匠は使ひ習ひ受其上を工夫を盡して

やうり合点系ものよて小日本ゆくハ至極大切の事ハ傳

授もたなく秘言古もたなく自己の分別して増をぬくことあるは各

は存んむといふ家老どもいやはなれり何れも何れハ其時五郎

左衛門さまに其事よて一國の仕置よて数万の士民の一命よ

てん大事ゆく安危れ至極よてんまを異國ゆくハ聖人賢人の教

つるまの洞萬世の鏡よぬ道を秘言いしはよ今の志とよ  
此誓古たなく自己の分別して増をぬくことあるは各  
の至極よと語アたり

右雨夜燈一卷備藩湯常山先生所述也臣嘗借  
諸寮崎君脩氏謄寫以為家珍焉今命筆工寫取  
一本以備棲霞公子之覽仰希公子旦夕誦  
之有以助為人君盡天職之志云爾

明和八年辛卯秋九月八日

臣赤松勲恐惶謹跋

兩夜の燈原書三十條なりしを此度常山紀談を彫刻しし序の  
此書をも彫んとすし彼紀談と同條をも悉く省たり其申  
小太田持資の条飯田角吉の条中院内府の条井伊掃部左衛門の条な  
らんと同事を再考し其六其条を并せしむる物語有て異あり趣を  
あまばかり但末の佐藤直方此条のへ全く同本あれども作  
者の意何れとれし紀談の末よいましこれハ此書も其意を  
よそとしてけり置つて削りし条どもハ此書第二  
田満徳丸の條の段の次は板倉伊賀守の段の次は同内膳正  
及言行の段の次は土屋但馬守の段の次は番大膳の段の次は  
合徳院様御行儀の段の次は奥平家の士は妻節操の段の次は細川  
越中守の曹の扱ひを論ぜし段の次は安藤帯刀の条多

上野女を評せし段の次は那波道圓直緒の段の次は水野  
日向守及行状の段の次は會津神公の法事其次は松平左衛門督及  
士卒を扱ひし段の次は十三條なりしハ書肆の好みて  
かくハ削りしものなりしはさばり物せしめ原書の姿を  
失ふとして其事の由をかくハいふよりなりぬらん

平野敬邁  
赤木周憲 識



# 病家須知

擇善居士人著

此書初小養生の要務を説き一切の病小薬を用ひて唯常の心掛て治さるべき事を示し一医者之駈引者病の心得食物の善悪小児の育方瘡癩の用意懐妊の多當まで都て懇切小書若せり有益の書あり

# 養生訣

右同著

此書ハいとも行ひ易き養生の方を記し人をしめて毎病長命を延びしむる途

# 武雜記補註

伊勢守平貞孝主著  
裔孫貞丈先生註  
長澤伴雄先生補

全三冊

此書ハ伊勢守貞孝朝臣の抄録されしものて室町將軍家の儀式諸調度の来由且用ひ振すもの養らるるを裔孫貞丈先生細注を加へ書圖を製し其形状を摸して書たり此度長澤伴雄先生善本を校合し

て頭書の補注を加へ刊布せしむるは武家故実要用の重宝といふべし

# 常山紀談

備前湯浅元禎先生輯

初輯より五輯迄  
全二十五冊

此書ハ常山先生の隨筆にして上應仁文明より下元和寛永の比まで戦國の  
將士闘争小周旋の事どもを主と記して史書を編べた料小せしめて  
遺稿あるは事實の正しはハいりも更にお亂世の光景を伺ひ觀るべき物  
此卷の右小抄分り誠武家必用の珍書あり

# 雨夜燈

右同作

全一冊

此書ハ當大將軍家御治世の初より名君良臣の言行の道不叶ひ  
て有難く事どもを輯めく治世の龜鑑とせしめて書あり  
此度常山紀談刊行の序小上梓して普く世に施し

# 發行

江戸日本橋通二丁目	須原屋	茂兵衛
同 淺草茅町二丁目	須原屋	伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋	佐兵衛
同 全所	小林	新兵衛
同 芝神明前	岡田屋	嘉七
同 本石町十軒店	英	大助
同 下谷車阪町	和泉屋	庄治郎
備前岡山	片上屋	孫兵衛
同 全所	中嶋屋	益吉
備中倉敷	太田屋	六藏
京都寺町三條通	丸屋	善兵衛
大阪心齋橋通安堂寺町	秋田屋	太右衛門

# 書肆

